2011 年度短期派遣 EUROPA　報告書

大学院総合国際学研究院　講師　西岡あかね
派遣期間：2011 年 8 月 1 日～2011 年 9 月 30 日

本研究の目的は、第一に、表現主義の朗読理論と劇場理論についての研究を深め、これを既に発表している文学キャバレーの研究と関連付けること、第二に、政治的表現主義文学の行動主義に注目し、この潮流が、表現主義の美学的・言語的なパフォーマンス志向性とどのように関係しているかを明らかにすることにあった。特に第二の点に関しては、これまでの研究ではほとんど扱ってこなかったので、今回の派遣期間中、重点的に調査・研究を行うことを予定していた。その際、対象となる主な作家として、クルト・ヒラー、アルフレート・ヴォルフェンシュタイン、ヨハネス・ベッヒャー、ルートヴィッヒ・ルービナーが挙げられる。

このような計画に従って、派遣期間中、以下のような手順で調査、研究を行った。まず、8 月 1 日から 7 日の期間、ベルリン国立図書館でヨハネス・ベッヒャーに関する先行研究の調査を行い、最新の研究動向を確認したうえで、芸術アカデミー所蔵のベッヒャー遺稿集の調査を行った。ベッヒャー遺稿集の大半は、書簡と作品原稿・草稿で占められている。その他、芸術アカデミーがベッヒャーゆかりの人物に行ったインタビューの記録などもコレクションに納められている。そのうち、本プロジェクトの研究対象となる初期のベッヒャーに関する資料は数が限られているが、いくつかの興味深い未出版資料を発見することが出来た。

8 月 8 日から 9 月 23 日までの期間は、研究機関をマールバッハ・ドイツ文学文書館に変え、主に行動主義（Aktivismus）の研究を進めた。行動主義は第一次世界大戦直前からドイツ革命までの間に広まった急進的かつ組織的な精神運動であり、運動体としての表現主義を代表する潮流の一つである。従来、行動主義に関しては、その精神的構造や主導的理論、運動展開の過程などを追った研究が主になされ、この潮流を、表現主義のパフォーマンス的文学実践や美学的なパフォーマンス性と関連させて論じたものはほとんどなかった。この研究史の空白地帯を埋めるべく構想された本研究では、主に以下の点に注目した。

1. クルト・ヒラーにおける文学実践と政治活動の関係
2. ヨハネス・ベッヒャーの表現主義期の詩作、文学実践とその後左傾化に至った過程
3. 行動主義的志向を持つ表現主義作家の作品に現れた「声」のモチーフ
4. 表現主義の詩文やマニフェストにおける「弁士」「朗読者」「演説者」の像

具体的には、(3)及び(4)の問題と関連して、ヒラー、ヴォルフェンシュタイン、ルービナー等、行動主義の理論形成や実践に関わった表現主義作家のマニフェストや理論的テクストの中で、詩人の社会的・政治的機能がどのように捉えられているかを調べた。更に、この考察とリンクさせる形で、行動主義的詩人の作品では「詩人」がどのような姿で描かれているかを分析した。また、各作家の作品に見られる美学的特徴に注目し、

言語の音声的側面と感覚性の強調という、表現主義独特の、パフォーマンス的言語意識が、行動主義の作家達の政治意識とどのように関わっているかを考察した。

その一方、特に(1)の問題と関連して、ヒラーを中心とする、行動主義的作家グループの文学実践の様子を調査した。ヒラーが 1912 年から 14 年の間に主宰した文学キャバレー「グヌ」に関しては既にリチャード・シェパードの研究が存在するが、ヒラーが雑誌『行動』の編集者、フランツ・プフェンフェルトに協力して開催した「雑誌『行動』の夕べ」については、これまでほとんど何も明らかになっていなかった。また、(2)の問題とも関連しているのだが、1916 年に刊行された反戦的な表現主義雑誌『ノイエ・ユーゲント』が主催し、ベッヒャーや後のダダイスト、ヴィーラント・ヘルツフェルデ、ジョージ・グロッスなどが参加した朗読会や、ベッヒャーが単独で行った朗読会の詳細は全く調査がされていなかった。そこで、マールバッハ滞在期間中、これらの文学実践の詳細を明らかにするべく、各作家の回想や当時の手紙、日記、また、表現主義雑誌に掲載された予告などをもとに、各イベントの開催日時やその内容を可能な限り再現しようと試みた。しかし、これらの資料だけでは、イベントの詳しい内容までは分からなかった。そこで、当時の新聞に寸評が出ていないか調査する必要性を感じ、9 月末にベルリン国立図書館の新聞部で追加調査を行うこととした。

マールバッハでは、上述の研究と並行して、当初の研究目的の第一点に関する調査も行った。すなわち、文学キャバレー以外の、表現主義のパフォーマンス志向的文学実践、具体的には朗読の実践と理論、演劇理論と劇場実践にまで視野を広げることで、これまでの、主に美学的見地から行ってきた、ドイツ表現主義文学のパフォーマンス性に関する研究を総括することを目指し、以下のような資料の調査を行った。

1. 19 世紀末以降盛んになった劇場的空間での朗読会について、表現主義の作家たちが書いた批評
2. １の資料と比較対照するための資料として、同時代の新聞や雑誌における朗読批評
3. 表現主義の作家たちが、ヴァリエテやレヴューのような、伝統的な劇場とは異なる新しい演劇形式について述べたエッセイや評論など

9 月 23 日から 29 日までの期間は、上述のように、ベルリン国立図書館の新聞部で追加調査を行った。先に述べた「雑誌『行動』の夕べ」、『ノイエ・ユーゲント』の朗読会についての寸評を探すとともに、これらのイベントと比較するため、ほぼ同時代にベルリンで行われた、イタリア未来派のアクションや「ダダの夕べ」についての記事の有無も調べた。その際、文芸欄に定評のある、ベルリンのリベラルな新聞 Berliner Börsen-Courier と Berliner Tageblatt、Vossische Zeitung、Der Tag、更に、大衆紙である BZ am Mittag を調査の対象とした。結果、いくつかのイベントについて、これまでの研究では言及のなかった記事が多数発見できた。

今後の研究予定だが、派遣期間中、当初の予想を超えるほど多岐にわたる新資料を発見することが出来たため、まずはこれらの資料を精査、分析することから始めたい。その成果は今後、順次、論文の形で発表していきたいが、特に、行動主義作家の文学実践については貴重な資料を得ることが出来たので、できるだけ早い時期に論文で取り上げ、

行動主義と表現主義文学のパフォーマンス性との関連を明らかにするための最初の取り組みとしたい。論文の発表媒体としては、日本独文学会会誌や本学論集などを考えている。また、当初帰国後に執筆を予定していた、表現主義の朗読理論に関する論文についても、早い時期に完成させたい。本研究の重要な対象をなっているベッヒャーに関しては、まだ研究を始めたばかりでもあり、表現主義の重要な作家の一人であるにも関わらず、日本ではほとんど知られておらず、ドイツでも十分に研究されているとは言い難いため、今後時間をかけて取り扱ってゆきたい。